

祖父の仕事と、私の役割

新見市立哲多中学校

一年 塩 見 ゆいか

「猿じゃ！」外から聞こえる祖母の大声に、私は飛び起きた。そして、靴のかかとをふんだまま外へ飛び出した。初めて間近に見た猿だ。それは、一匹や二匹ではなく、十匹くらいはいたか。庭に植えているミニトマトを取って食べていたのだ。私は、怖い気持ちもあったが、興味の方が勝っていた。恐る恐る一步近づいたら、猿の群れは、山の方へ逃げていった。そして、裏の畑を見たら、まだ猿の子どもがあちこちにいて、なすやきゅうり、トマトにとうもろこし、いちじくまで取っていたのだ。それも、熟れた野菜だけでなく、青くてまだまだ食べられない野菜やいちじくまで取っているのだ。祖母が、猿を追うと裏山に逃げて行った。私は祖父に、

「じいちゃん、猿が今、いっぱいおって野菜とか食べとったで！」

というと、祖父は、難しそうな顔をして、畑へ出て行った。そして、どのくらい被害があつたのか見て回っていた。我が家は、畑が何か所かあつて、祖父が一人で作るには、結構大変な広さだ。それを祖父は、ほとんど一人で作ってい

る。涼しい時期は、明るくなってから薄暗くなるまで、ご飯以外は、ほとんど畑に出ている。夏は、朝の五時ぐらいには畑に出て、暗くなるまで畑にいる。今みたいに暑い日には、私は朝から夕方まで学校で勉強していると、かなり暑いし、しんどい。それを、祖父は外にいろのだ。私や姉がいるときは、お茶を持って行き、こまめに家に入るように声をかける。だけど、私たちがいない日は、ご飯を食べたらすぐに畑に行く。暑い日も寒い日も、腰が痛い日もシツプをはりながらも、祖父の畑仕事に休みはほとんどないのだ。肥料をやったり、水やりをしたり、畑を耕したり。そうして、たんせい込めて作られた祖父の野菜は、甘くてとても美味しい。

私も、小学生のころ、夏休みにプランターでミニトマトを栽培したことがある。毎朝、涼しいうちに水やりをし、土が乾いてきた夕方には、また水やりをする。はじめのうちは、「早く育たないかな」と楽しみにしていたけれど、段々と水やりが面倒くさくなっていた。プランターでさえそうなのに、祖父は、広い畑で何時間も、いやにならないのかなと思議に思う。お給料も出ないのに、何であんなにがんばれるのだろう。そう思つて、祖父に聞いてみたことがある。

「じいちゃん。何で毎日、そんなに畑に出てるん？毎日毎日、あきんの？」

と。祖父は、

「そりゃあ、毎日しんどいで。体がだるい日もあるで。段々体も動かんようになった。でも、あんたらが、美味しいなあ言うて食べてくれるけえ、嬉しいが。」

と言っていた。

去年の夏、家族の半数以上がコロナに感染し、一週間くらい隔離生活をした。祖父も隔離生活をした。三日間くらいはしんどくて大人しく寝ていたが、それ以降は体が楽になり、一日に何度も天気を気にしたり、畑の野菜を気にしたりし始めた。

「ちょっと水をやってくるわ。野菜が、みな枯れてしまうけ。」

と、外に出ようとソワソワしだした。それを私は、必死で止めた。そして、隔離生活が終了した日の朝。早くから部屋に祖父の姿はなかった。朝ご飯を食べに帰ってきた祖父は、元氣のない声で、

「野菜が、みないけなんだ。」

と言った。わかつてはいたのだろうけれど、実際に畑を見てショックだったのだと思う。

あの時と、同じだ。今回、猿が出て、畑の野菜をたくさん取って行った。まだまだ、これから熟れる、青くて小さい野菜まで……。荒らされた畑の中に、ぼーっと立って畑を見ていた祖父の背中が、あのコロナの時の、野菜が全滅したと話す、あの時の元氣のない祖父の姿と重なった。

我が家の畑は、今、いつもの夏に比べて広々としている。

いつもは食べきれないほどの野菜でにぎやかなのに。今は、さみしいほど広い畑に、パラパラとある野菜。祖父の元氣のない背中が、我が子のように育てた野菜がなくなっただらだ。

私は、もつと祖父の野菜を感謝して食べなくてはならない。一生懸命、毎日がんばって育ててくれた野菜なのだから。

私の役目は、祖父が元氣に野菜作りができるよう、祖父の健康管理をすることだ。無理なく畑仕事をしてもらうために、お茶を持って行ったり、腰をふんでマッサージしたり、おいしいご飯を作ったり、いつもは、なかなか言えないけれど、

「おじいちゃん、いつも美味しい野菜を作ってくれてありがとう。これからも、まだまだ元氣でいてね。そして、美味しい野菜をたくさん作ってね。」